

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 7 月 19 日 11:05 AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 35,000～42,500 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 32,000～41,000 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 14,500～18,350

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 137.000～162.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 99.578～108.350

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足・エリオット波動分析】

6 月下旬よりトライアングルから上放れた波動は、22 年 3 月安値(24,681 円)を起点とするインターミディエイト級第(3)波における、マイナー級第 5 波に位置付けられます。

この第 5 波は 42,426 円(7/11 高値)を以て完了したとみられます。

水準面では、第 1 波と第 5 波はほぼ 1:236 のフィボナッチ比率関係[42,470 円]となっていました。さらにチャートは、21 年 2 月高値から引いたレジスタンスラインへの到達もはたしています。

同じ日の TOPIX 終値は 2929 となり(ザラバ高値は 2946)、第 1 波と第 5 波が等しく上がる水準[2931]を達成しています。

さらにトライアングルからの上放れ(第 5 波)はごく短期にとどまりました。「とても強いが、短期で終了する」という(トライアングル後の)第 5 波の特徴を表しています。

週足ローソク足をみると、先週(7 月 2 週)出現した長大な上ヒゲを持つ「流星」に続き、今週はおそらく「包み(大)陰線」が見込まれます。これらは日経平均の重要な天井打ちを示唆しています。

22 年 3 月以来の③波-(3)波「サード・オブ・サード」は、2 年 4 カ月かけて完成したとみられます。この見方が正しければ、今は③波-(4)波調整の序盤にあります。この調整は 9~11 月まで続き、それを以て日経平均は 4 年サイクル底を付けることでしょう。

今月のマンスリー・フォーカス(No.42)に書いたように、日経平均は高値から 15%~20%調整する可能性があります。7 月高値 42,426 円から 15%~20%の調整は 3 万 6000 円~3 万 4000 円であり、4 年サイクル底のターゲットレンジとして注目です。



【日経平均 日足・エリオット波動分析】

37,950 円(6/17 安値)以来の上昇・マイナー級第 5 波は、42,426 円(7/11 高値)を以て完成し、そこからはインターミディエイト級第(4)波の調整とみられます。

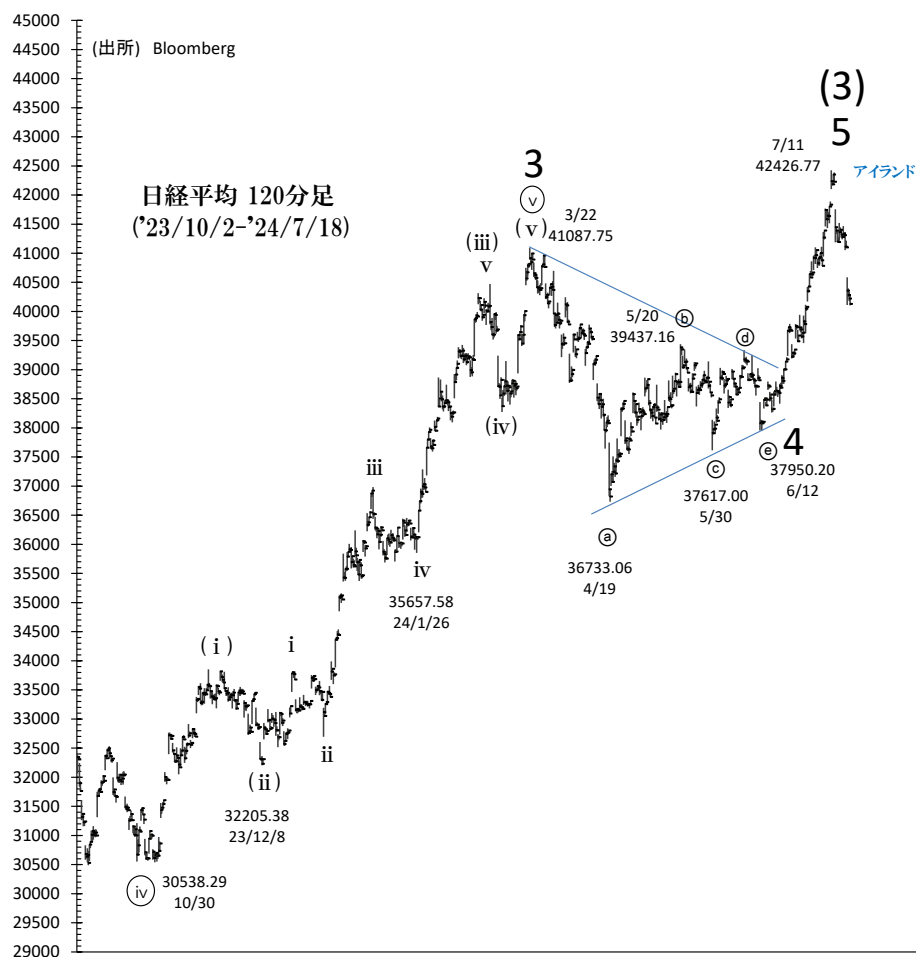
7 月 12 日、アイランド・ギャップを空けて 1033 円もの急落(3 年 3 カ月ぶり下げ幅)。さらに 18 日には二つのギャップを空け、971 円安となりました。

7 月 17 日にはパラボリック SAR が、翌 18 日は MACD が、各々売り転換しています。18 日終値は一目均衡表の基準線(40,188 円)を下回りました。弱気の動きは次のステージを迎えたようです。

日経平均は目先、4万円大台～25日 MA(※)の攻防と思われます。

25日 MA を終値で下抜くと、第5波の上昇に対する61.8%押し水準・[39,660 円]を試す局面を迎えるでしょう。

※25日 MA…39,948 円(7/18)



NY ダウ



【NY ダウ日足・エリオット波動分析】

NY ダウは 22 年 1 月高値(36,952 ドル)以来、プライマリー級④波展開中とみられます。22 年 10 月からの上昇は④波における(B)波であり、それは「不規則天井(イレギュラー・トップ)」です。(B)波の後に続く(C)波の下落スケールは、(A)波の下落(22 年 1 月～22 年 10 月)に匹敵するか、あるいは、より大きなものになるでしょう。

22 年 10 月安値(28,660 ドル)を起点とする④波中(B)波は、ダブル・ジグザグ[W-X-Y]を形成しており、23 年 10 月安値(32,327 ドル)からの上昇は Y 波ジグザグ[(a)-(b)-(c)]に当たります。

あるいは、22 年 10 月安値以来の上昇はプライマリー級の第⑤波かもしれません(後述)。

NY ダウは[トライアングル]から上放れていますが、それは「最後の上昇」とみられます。

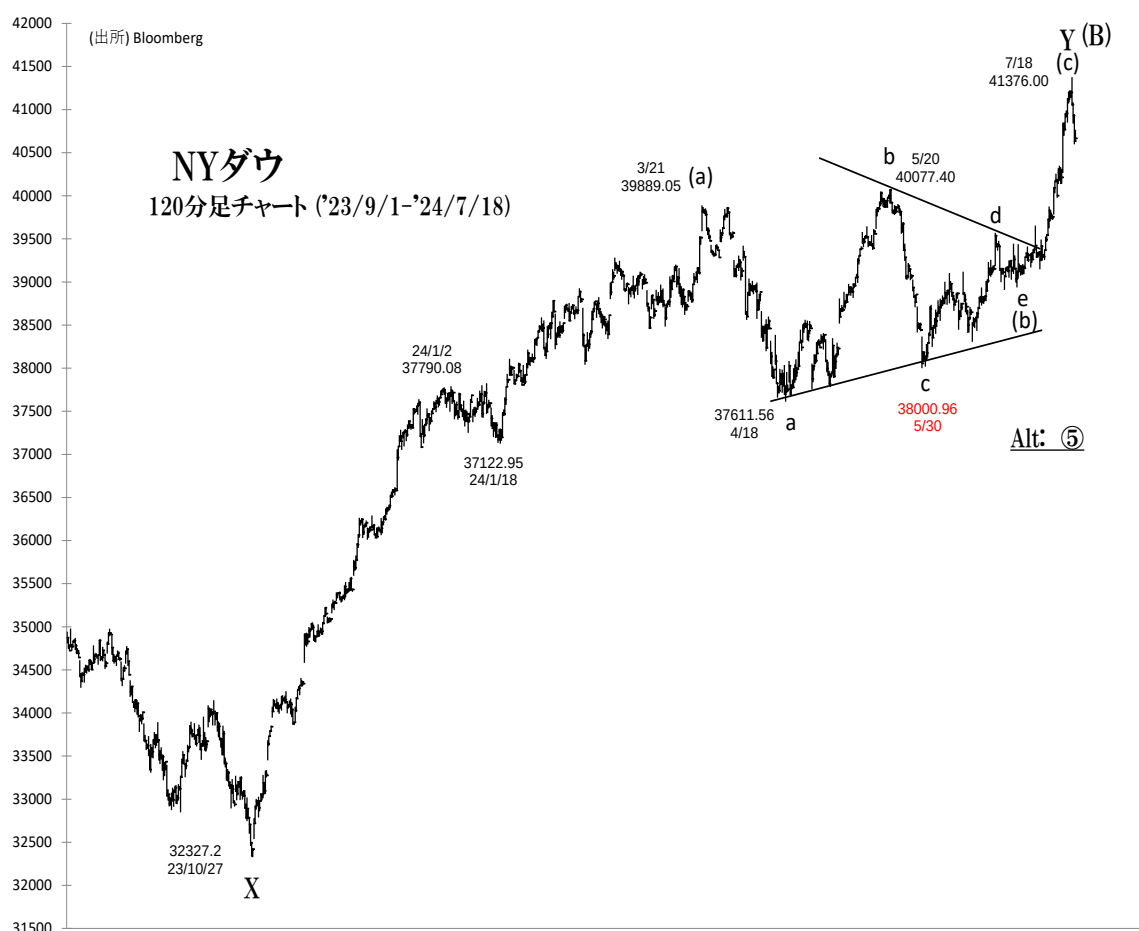
なお今週は半導体株が急落する一方で NY ダウや小型株が逆行高となっており、この先は出遅れ株を物色する動きが強まる展開に期待する声が高まっています。

もっとも、筆者はそのような潮流は一時的なものとみています。

00年のドットコム・バブル崩壊のときは、ナスダックは高値から78%下落し、S&P500は50%下げました。それらに比べると「オールドエコノミー銘柄」で構成されるNYダウの下げは限られましたが、それでも高値からの調整は38%を超えました。

ここ2年程度の米株高はナスダックが主導しましたし、S&P500もその恩恵を享受してきました。今後は逆の動きが、つまり想定している米株安はナスダックがけん引すると思われます。

この先、ナスダックやSOX指数などが大きく下げる中で、NYダウが「相対的に」下げない可能性はあるでしょう。しかし、絶対水準での上昇が持続するかは疑問です。



【NYダウ時間足・エリオット波動分析】

3月高値からの(b)波は[トライアングル]と解釈できます。それは38,937ドル(6/28安値)で完成し、以来、(c)波による上昇とみられます。

もう一つの波動カウントとしては、現在進行中の上昇は第⑤波であり、その完成を以て22年10月安値(28,660ドル)からの5波構成による強気相場はすべて終わります。

ちなみに、上記二つの見方の間に大きな差はなく、重要な天井が接近しているという点で共通しています。

ナスダック



【ナスダック総合指数日足・エリオット波動分析】

22 年 12 月からの上昇は、プライマリー級第④波における(B)波に位置付けられます(あるいはプライマリー級第⑤波)。(B)波終了後には(C)の下落がスタートしますが、(C)波によりナスダックは 12,500～10,000 へ下落する可能性があります。

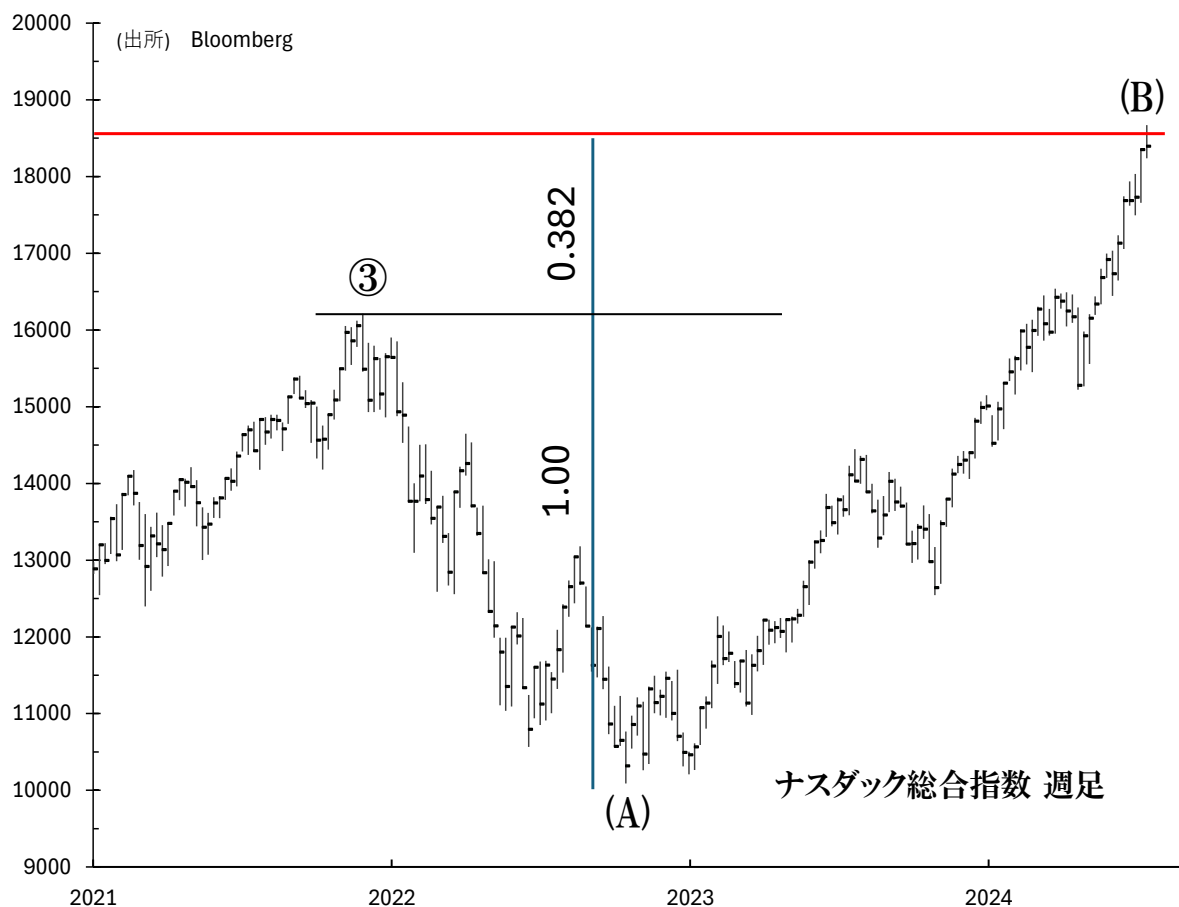
④-(B)波による上昇は[ダブル・ジグザグ(W-X-Y)]編成です。今年 4 月安値(15,222)からは、Y 波(②-③-④)中③波による上昇とみられます。

7 月 11 日には一時 18,671 まで上昇し、フィボナッチ比率の節目に達しました。

[18,551]…④-(B)波の上昇幅が、④-(A)波(21 年 11 月～22 年 1 月)の下落幅に対し 1.382 倍

加えてこの日のローソク足「包み大陰線」は、ナスダックのピークアウトを暗示するものでした。

7 月 17 日にナスダックは大きなギャップを空けて急落しましたが、それは**上昇トレンド終了を意味する [Breakaway Gap] の可能性が高い**でしょう。このギャップが埋められない限り、ナスダックが弱気トレンドに転じたというシナリオは支持されます。



【フィラデルフィア半導体株指数(SOX 指数)・長期エリオット波動分析】

[基本シナリオ(プリファード・カウント)]

SOX 指数は、08 年 11 月安値(167)以来の第③波による上昇を 22 年 1 月高値(4068)で完了し、そこからは第④波の調整が展開している、とみています。

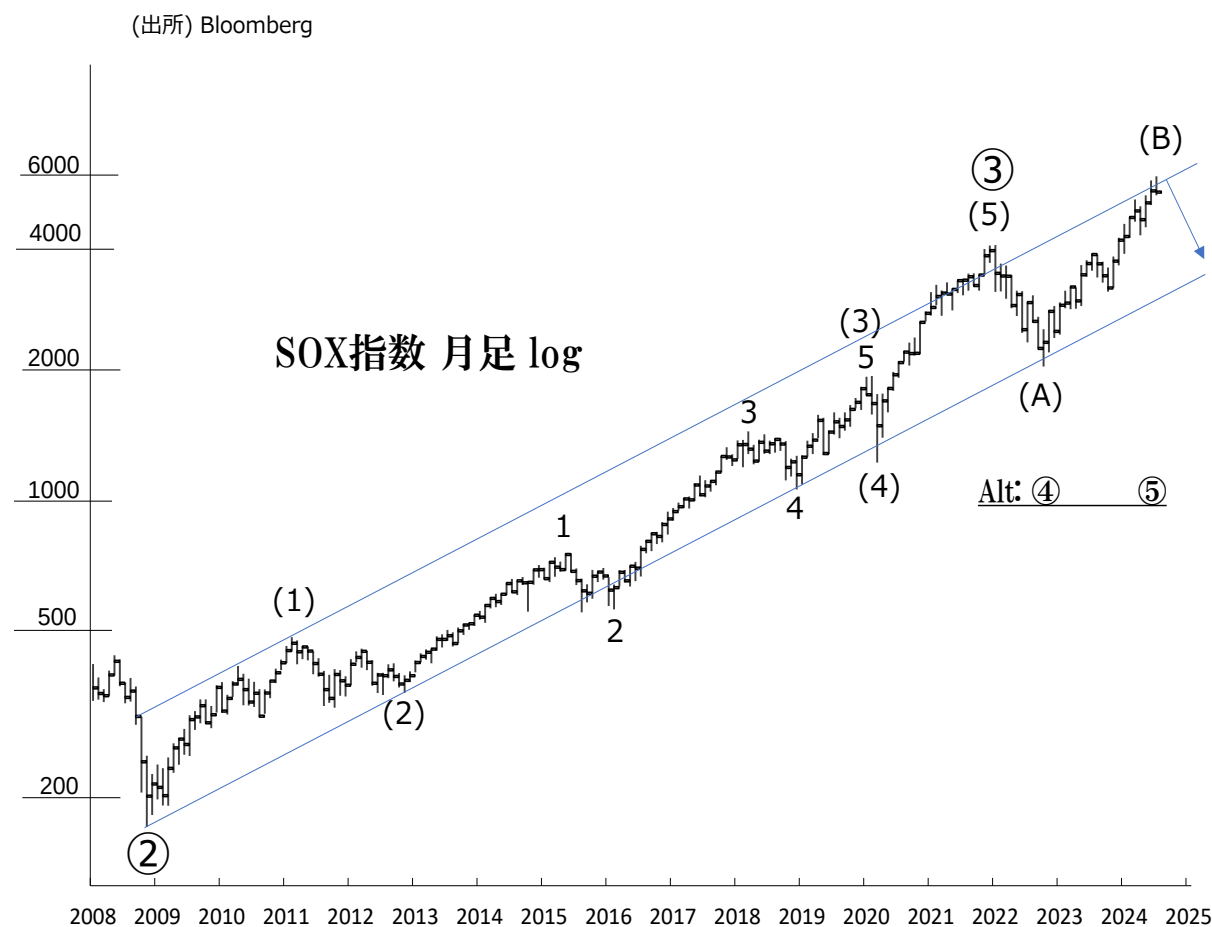
これまで書いてきたように、この第④波は[エキスパンディッド・フラット]か[ランニング・フラット]を形成するとみられ、22 年 10 月安値(2089)からは(B)波の上昇に位置付けられます。

(B)波が終わった後には(C)波による下落トレンドが続きます。

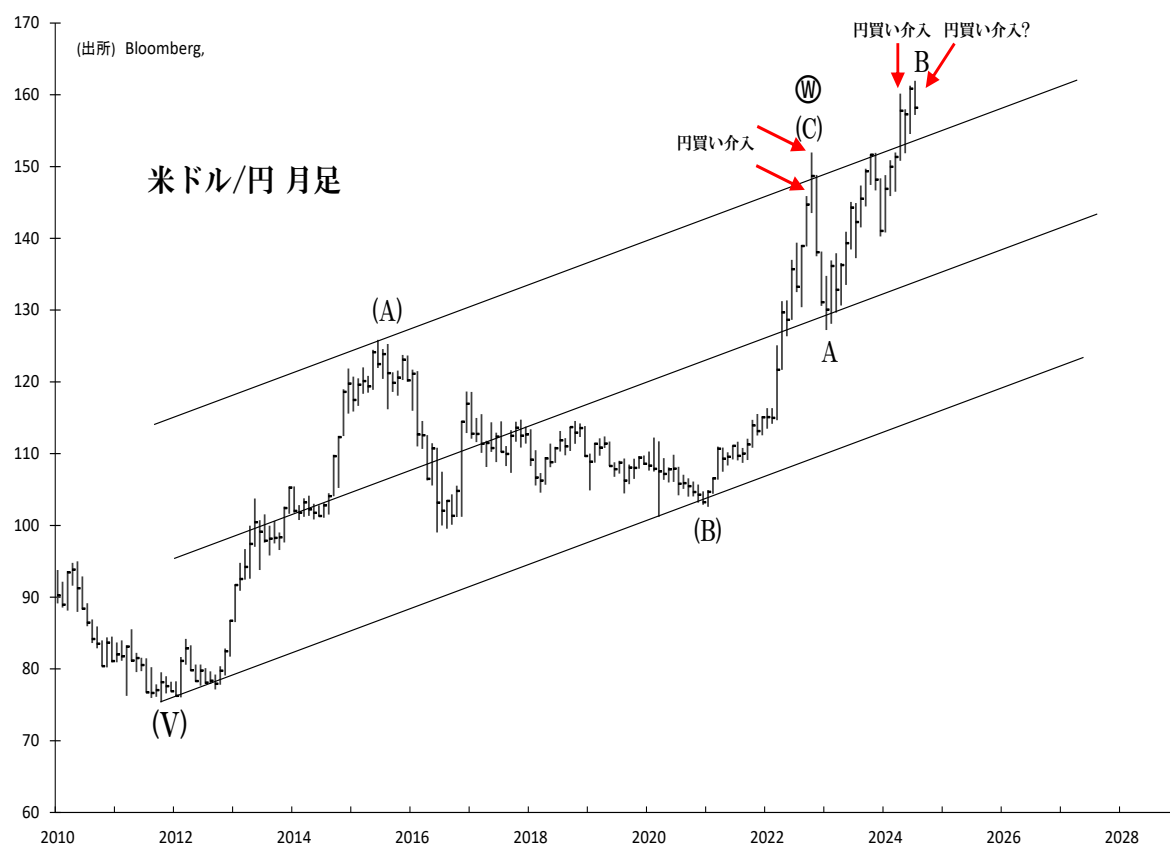
それは④-(A)波(22 年 1 月～22 年 10 月)の下落率(48.63%安)に匹敵するか、あるいはそれを超えるスケールでの下落が見込まれます。

[代替シナリオ(オルタナティブ・カウント)]

上記の基本観に代わる見方として、「22 年 10 月安値から足元までの上昇が第⑤波」をあげられます。このケースだと、第⑤波完成後の調整は(基本観に比べ)より深く、より長期にわたるものになるでしょう。



米ドル/円



2011 年 10 月の 75.570 円以来の(A)-(B)-(C)[ジグザグ]による円安①波は、151.899 円(22/10/21)を以て終わり、そこから 2028 年頃までレンジ相場を形成していく、というのが筆者による米ドル/円(ドル/円)の基本観です。

【月足・エリオット波動分析】

161.938 円(7/3)を以て、8 年サイクル高値を付けた可能性が高い、とみています。

足元、メディアや SNS を通じて「円買い介入でも円安は止められない」「1 ドル=200 円説」などという極端なフレーズが飛び交い、「円安は構造的なもの」と永久に円安が続くかのようにいわれてきました。しかし相場は循環論で語るべきものであり、誰もが納得しやすい相場の理屈や構造論が持ち込まれたとき、その相場は大抵終わりに近いものです。今回でいえば、誰もが円安継続を信じて疑わないからこそ、円安バブルの終わりが近いことが暗示されていました。

月足は、長期上昇チャネルの上側から大きく逸脱していますが—今月のチャネル上限は 153.750 円に位置します—このように「極端に上がり過ぎ」の状態は長続きせず、いずれチャネル内に回帰する公算が大きいと思われます。

7 月 11 日の日本時間 21 時半に米 CPI(予想を下回る結果)が発表されると、円相場は円高に大きく振れました。政府・日銀が 3 兆円超の規模で、ドル売り・円買い介入を実施との観測があります。

また翌 12 日には、ユーロ/円に対するレートチェック報道もあり、ユーロに対しても円買い介入が入るのではと警戒され始めました。

これら政府・日銀による一連のアクションにより大きなトレンドが劇的に変わるとはいえませんが、少なくとも「円安パニック」「円安バブル」終息への、最初のきっかけにはなり得るでしょう。

今回は特に、円安から円高への基調転換は対米ドルだけでなく、他の主要通貨に対しても広がり始めた点に注目しています(名目実効円レートは円高に動き始めています)。



【週足・エリオット波動分析】

22 年 10 月 (151.899 円) からの A(↘)-B(↗)-C(↘)編成において、23 年 1 月 (127.158 円) からは B 波に位置付けられ、それは 151.899 円を超えて不規則天井(イレギュラー・トップ)を形成しています。

B 波は 161.938 円(7/3)を以て完成したと思われます。それは B 波の目標値[161.350 円]を満たすものでした。この見方が正しければ、足元は C 波(ドル安・円高)の序盤に当たります。

C 波の長さについては、A 波が有効な「ものさし」になります。

A 波の長さは 24.741 円(およそ 25 円)でしたから、C 波の長さも同様と考えると、**137 円辺りが C 波のターゲット**になります。



【日足・エリオット波動分析】

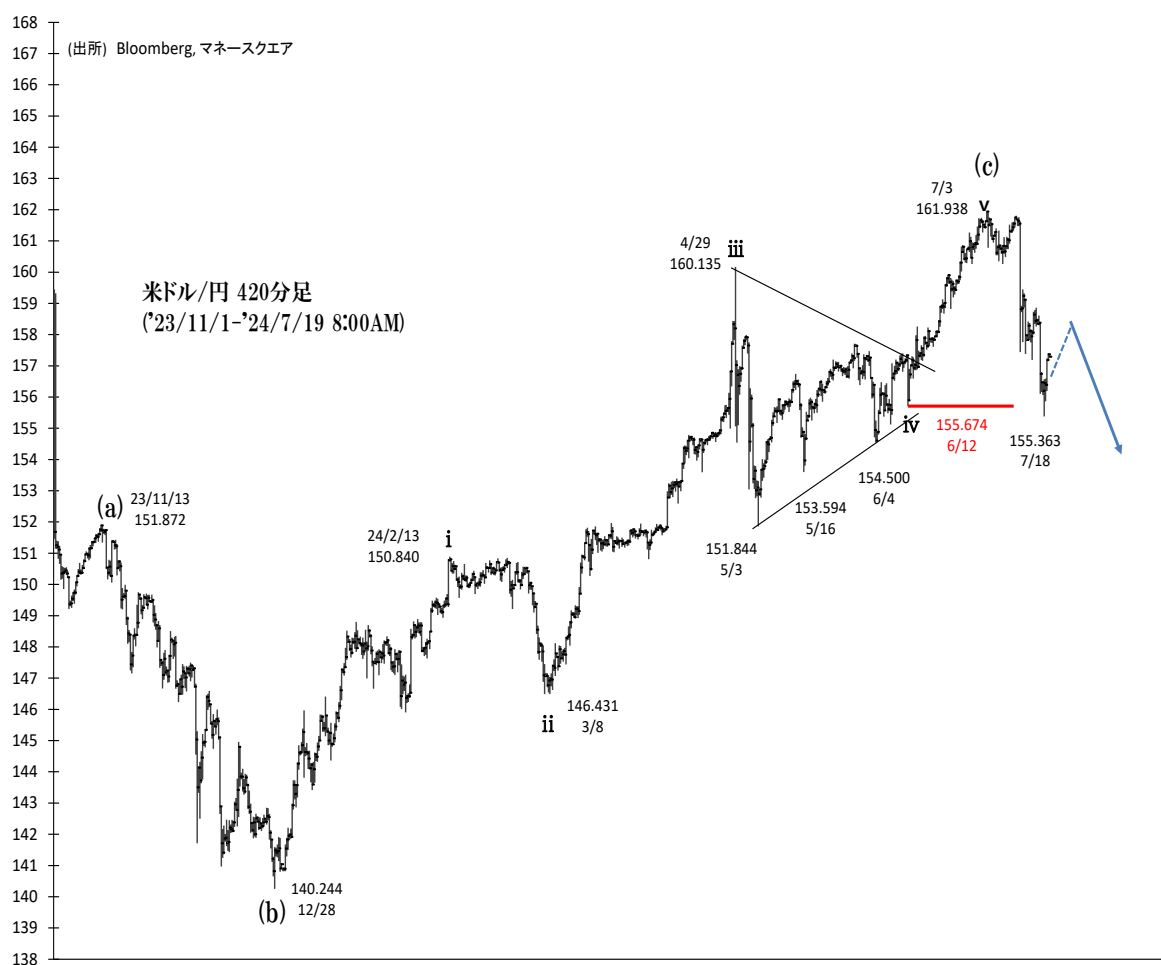
4月に入ってから急激なドル/円上昇(152円⇒161円)は、日米実質金利差を反映しておらず、専ら投機によってもたらされました。『円安バブル』と呼べる過剰な円安は、今後はあるべき水準へ修正されていくと思われます。

[日米実質金利差による推計値]・・・147.402 円

筆者は、米長期金利の大幅な低下⇨大幅な米ドル安を見込んでいます(実際そうってきました)。
今後は日米実質金利差の縮小に沿って、ドル/円は 150 円を下回っていくでしょう。

足元は 100 日 MA(※)が下値として意識されやすく、目先は反発機運の高まりがみられるでしょう。もっとも反発は短期にとどまり、遠からず 200 日 MA を打診する可能性が高いと考えます。

※100 日 MA・・・155.210 円(7/19)、200 日 MA・・・151.440 円(同)



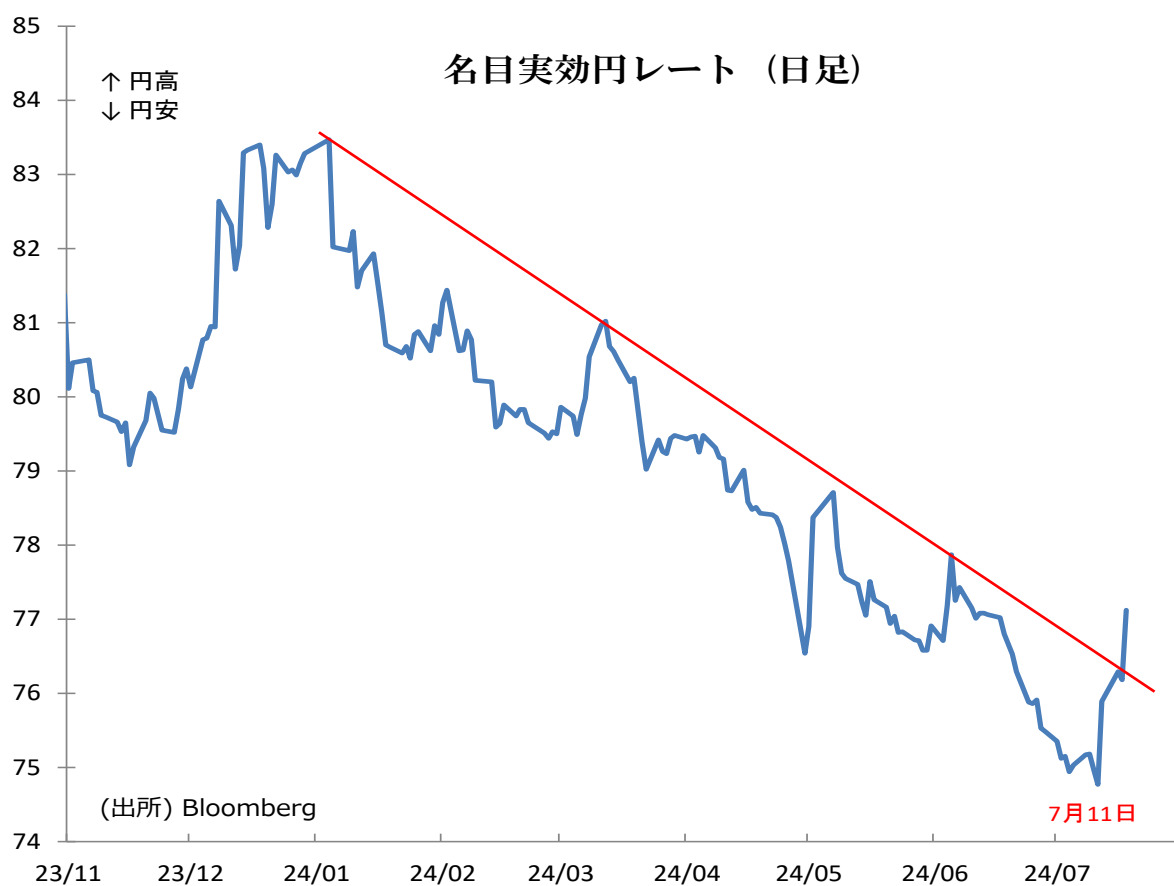
【時間足・エリオット波動分析】

昨年末の 140.244 円からのドル高・円安は、161.938 円(7/3)を以て終わり、**トレンドは円安から円高へ転換した**と思われます。

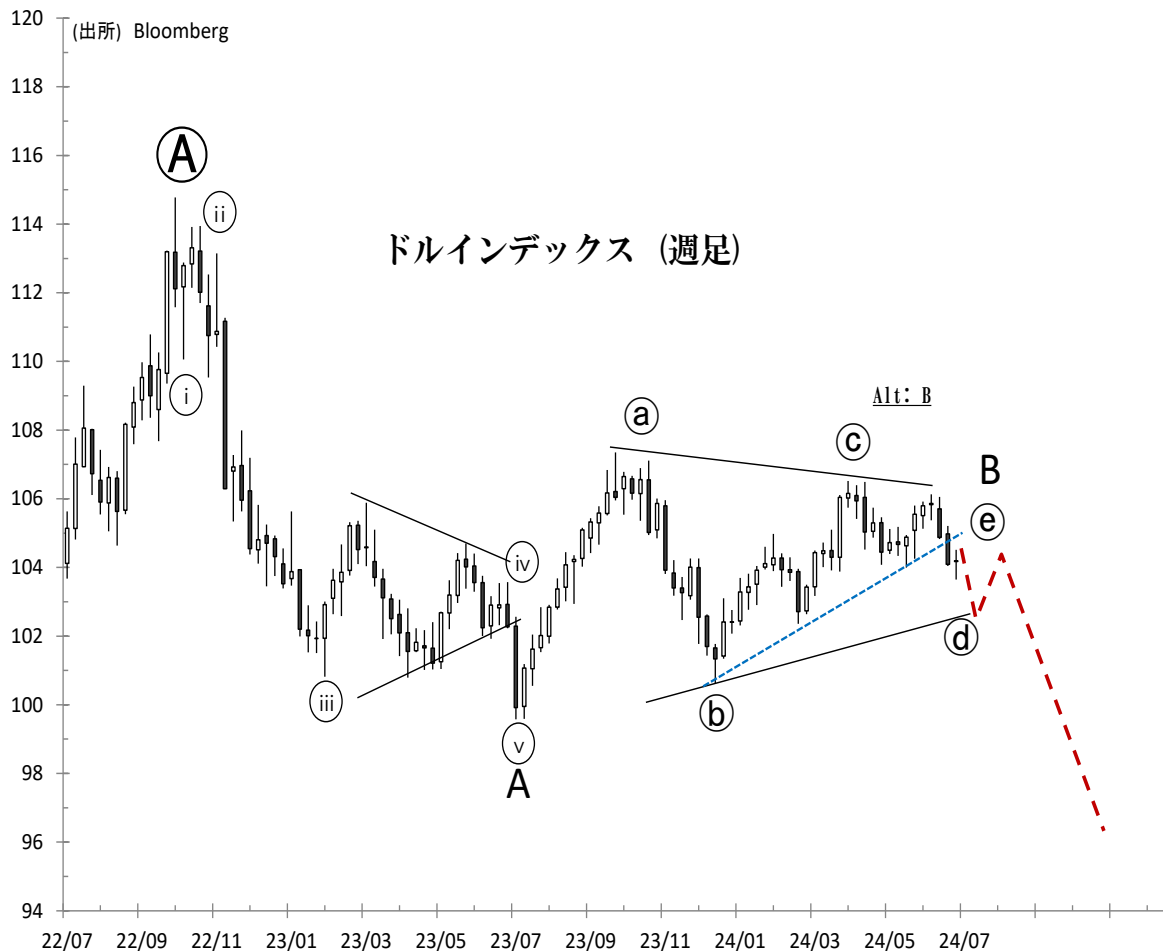
節目としていた 158 円を明確に下抜き、7 月 18 日には 1 カ月半ぶり円高となりました(一時 155.363 円)。この水準は(前述のように)100 日 MA に近く、いったんはリバウンドの動きがありそうです。

38%-62%戻りでみれば、157.900 円-159.450 円が上値メドとなります。

目先リバウンド終了後に次のドル安・円高局面が想定されます。それは当面、153.594 円(5/16)を打診することでしょう。



ドルインデックス (ドル指数)



【週足・エリオット波動分析】

22 年 9 月高値(114.778)以来、ドルインデックスは A(↘)-B(↗)-C(↘)編成による下落基調にあります。

23 年 7 月安値(99.578)を起点とする B 波は、トライアングル(a-b-c-d-e)を形成中であり、足元は④波のドル安局面が進行中です。

おそらく、まもなく B 波は完成し、その後に到来する C 波によって、ドル指数は 23 年安値(99.578)を大きく下回るでしょう。

派生的な見方として、「トライアングルは 105.915(6/21)を以て既に完成しており、そこからは C 波によるドル安が始まっている」というものがあります。

いずれにしても、**今後の大幅なドル安を想定**しています。

ただし 106.517(4/16)を上抜く動きとなったときは、短期的なドル安見通しはいったん撤回され、別のオプションが必要になります。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できるとされる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもあります。また、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
